

留学生を対象にしたパラフレーズ教材の必要性と教材開発 —日本語アカデミック・ライティング教育の観点から—

鎌 田 美千子

1. 研究背景及び目的

同じ内容であっても、筆記と口頭では、言語表現や述べ方が異なる。また、同じ筆記であっても、レポートや論文における文章と、発表レジュメやスライド資料における見出し・箇条書きでは、それぞれの表現形式が異なる。さらに広く言語使用場面を捉えると、目的や伝達手段、場面、ジャンル等に応じて適切な言語表現が用いられる。このような言語使用に必要となるのがパラフレーズ¹である。必要に応じて各種表現を変換させる言語スキル、すなわちパラフレーズは、さまざまな言語運用の基盤となるが、母語話者のように自然に身につくものではなく、意識的な学習が必要とされる。

一方で、日本語アカデミック・ライティング²に必要となるパラフレーズは、その種類が多岐にわたるにもかかわらず、これまで学習項目として整理されていなかったため、外国人留学生（以下、「留学生」とする）への日本語教育の中で十分に扱われてこなかった。後述する通り、従来の市販日本語教材で取り上げられているパラフレーズは、比較的単純なものに限られており、多様なパラフレーズの教示にまでは至っていない。第二言語としての日本語運用上の困難点³を考慮し、留学生に対するパラフレーズの教育方法を検討することの意義は大きい。

本研究の最終目標は、日本語アカデミック・ライティング教育の観点から、第二言語としての日本語によるパラフレーズの教育方法を構築することにある。本稿では、その第一段階として、パラフレーズ教材の必要性と教材開発を中心に論じる。具体的には、先行研究で確認されている、日本語学習者（以下、「学習者」とする）のパラフレーズ使用の特徴と、従来の主要な日本語教科書におけるパラフレーズの扱いをふまえた上で、パラフレーズを学ぶための教材の開発が必要で

¹ ある意味内容を他の表現によって表すことを意味する用語に「パラフレーズ」「言い換え」「書き換え」「換言」等があるが、本稿では、総じて「パラフレーズ」という用語を使用する。

² 本稿では、学術的な目的で書くこと及び書かれたものを「アカデミック・ライティング」と呼ぶ。具体的にはレポート、論文、レジュメ、スライド資料を対象とする。

³ 詳細は、鎌田（印刷中）を参照。

あることについて述べる（第2章、第3章）。あわせて、開発したパラフレーズ教材のねらいと試案を概説し（第4章）、最後に、まとめと今後の課題について述べる（第5章）。

2. 学習者のパラフレーズ使用の特徴

以下の二つの研究は、学習者のパラフレーズ使用の特徴を日本語能力との関係から解明している。仁科（1993）は、セミナーでの留学生と日本人学生の対話において理解が成立しない場合のパラフレーズを分析した結果から、日本語能力及び専門知識の双方が低い場合には、単語レベルのパラフレーズが多く、逆に双方の能力が高い場合には、談話レベルでのパラフレーズが多いことを明らかにしている。この結果は、口頭によるものではあるが、日本語能力が学習者のパラフレーズ使用に関係することを示している。藤村（1998）は、中級学習者、上級学習者、日本語母語話者のそれぞれの要約文におけるパラフレーズを分析している。原文中の一文の内容を要約文一文で表した「単独文」と、原文の二文以上の内容を要約文一文で表した「連合文」に分類した上で、その使用数を比較した結果から、中級学習者に「単独文」の使用が多く、狭い範囲のパラフレーズにとどまっていることを指摘している。

これらの研究から、日本語のレベルの向上とともにパラフレーズの範囲が拡大することが示唆されるが、一方で、上級学習者が日本語母語話者（以下、母語話者）に近い水準でパラフレーズを使いこなしているかどうかについても考える必要がある。鎌田・仁科（2009）は、パラフレーズ使用における量的な差異に着目し、難易度が異なる文章におけるそれぞれのパラフレーズと原文表現使用の割合を比較した結果から、学習者の場合、文章の難易度にかかわらず、原文表現使用の割合が有意に高く、母語話者に比べてパラフレーズが少ないことを明らかにしている。また、鎌田（2010）は、話しことばで述べられた内容を論文やレポートの文章に書き直す課題における上級学習者のパラフレーズを分析した結果から、単語レベルのパラフレーズ（例、話しことば「でも」→書きことば「だが」）ができていても話しことばの展開のまま書き換えているために文と文とのつながりが悪い事例を示し、文章・談話レベルからパラフレーズを捉えさせる必要があるとしている。さらに鎌田（2011）は、話しことばから書きことばにおける具体例か

らの抽象化において、母語話者が一連の文章・談話から読み取った意味内容を反映させたパラフレーズを広く使用しているのに対して、上級学習者にはそのようなパラフレーズが少ないことを指摘している。

以上の研究から、学習者のパラフレーズは、レベルの向上とともにその範囲が拡大するものの、上級学習者であっても量的・質的に母語話者ほどには達しておらず、パラフレーズの学習が必要であることが示唆される。

3. 従来の日本語教科書におけるパラフレーズの扱いと新たな教材の必要性

現在のところ、パラフレーズを体系的に学べる日本語教材はまだなく、レポート・論文作成を主眼に置いた日本語教科書⁴の中で一部扱われている。そのほとんどが話しことばとの対比（例．でも→しかし）で提示され、レポートや論文にふさわしい文体や語彙に関する基本事項として位置づけられている。表1は、留学生を対象にした主要日本語教科書で扱われているパラフレーズの種類を示したものである。取り上げられているパラフレーズの種類は、一部を除き、単語レベルのパラフレーズ⁵に偏る傾向が確認できる。もとの表現とパラフレーズとがほぼ一対一に対応するものがほとんどであり、それ以外のパラフレーズは、「名詞化」及び「2文以上のものを1文にするもの」を除き、取り上げられていない。例えば講義で話された内容や、インタビュー調査で得られた発言の内容を文章化する場合には、話しことばから書きことばへのパラフレーズが必要となり、両者の違いは、語彙のみならず述べ方自体にも及ぶ（畠,1987）。パラフレーズを単語と単語との対応で捉えるだけでは不十分であり、必要に応じて句、節、文、文章・談話といった、より広い範囲からのパラフレーズが欠かせない。だが、従来の日本語教科書では、このようなパラフレーズがあまり扱われていない。

他にパラフレーズが関連する学習項目には、「要約」と「間接引用」がある。いずれにおいても、もとの表現からの適切なパラフレーズが関わるものであるが、

⁴ 大学・大学院での留学生対象の日本語の授業でよく使われている以下の4冊を参照した。アカデミック・ジャパニーズ研究会編（2002）『大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』アルク、二通信子・佐藤不二子（2003）『改訂版留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク、佐々木瑞枝・細井和代・藤尾喜代子（2006）『大学で学ぶための日本語ライティング』The Japan Times、石黒圭・筒井千絵（2009）『留学生のためのここが大切 文章表現のルール』スリーエーネットワーク。

⁵ 本稿では、ある語を別の語に言い換える（書き換える）こと、また言い換えた（書き換えた）表現を「単語レベルのパラフレーズ」と呼ぶ。

既存の日本語教科書では、中心文やキーワードに着目させ、それらをもとに内容をまとめることの説明にとどまっている。要約や間接引用に必要となる種々のパラフレーズについては、あまり留意して取り上げられていない。

このように、従来の主要な日本語教科書においてパラフレーズが十分に扱われているとは言えず、これらの点を補完する教材の必要性が指摘される。前述した学習者のパラフレーズ使用の特徴をふまえると、一対一に対応する単語レベルのパラフレーズに加えて、句レベル、節レベル、文レベル、文章・談話レベル⁶といった、より広い範囲からのパラフレーズを取り上げる必要がある。次章では、このことをふまえ、新たに開発したパラフレーズ教材の概要を示す。

表1 従来の留学生用日本語教科書におけるパラフレーズの種類

	単 語							句 / 節 / 文 / 文章・談話	
	文末表現	接続表現	縮約形	副詞	指示表現	終助詞	和語漢語	名詞化	言語サイズ ⁷
例	です→である	でも→しかし	～てる→～ている	すごく→非常に	こんな→このような	かな→だろうか	使う→使用	～が減る→～の減少	2文以上→1文
大学・大学院留学生の日本語④論文作成編	○	○	○	○	○	○	-	-	-
改訂版留学生のための論理的な文章の書き方	○	○	○	○	-	-	○	○	○
大学で学ぶために日本語ライティング	○	○	○	○	○	-	○	○	-
留学生のためのここが大切 文章表現のルール	○	○	○	○	○	○	-	-	-

(○印：掲載あり， -印：掲載なし)

⁶ 文章・談話の内容を言い換えることと、個々のパラフレーズを文章・談話レベルから捉えることの双方を含む。

⁷ 「言語サイズ」とは、「語、句、節など統語的な単位 (川原, 1989; p.143)」を意味する。

4. 日本語アカデミック・ライティングのためのパラフレーズ教材の開発

4.1 教材のねらい

教材開発にあたって、学習到達目標を「レポートや論文、発表レジюме、スライド原稿のそれぞれに必要なパラフレーズを習得し、適切に使用できるようになること」とし、以下の二点を重視する。

第一に、従来の日本語教科書のようにパラフレーズをレポート・論文の枠組みからのみ考えるのではなく、図1に示す通り、「読む」「聴く」「話す」「書く」といったそれぞれの場面における言語活動との結びつきを重視し、必要となるパラフレーズを意識させる。具体的には、「読んで書く」「聴いて書く」「話して書く」といった場面を想定し、例えば関連文献を読んでレポートの一部としてまとめる、講義や講演を聴いてレポートにまとめる、インタビュー調査で得られた発言の内容をレポート・論文の一部としてまとめる、ゼミで発表した内容をレポート・論文にまとめる、ゼミで発表する内容を発表レジюме・スライド原稿にまとめる、レポート・論文の内容を発表レジюме・スライド原稿にまとめる、論文の要旨を規定の字数でまとめる等の学術的場面に付随するパラフレーズの習得を目指す(表2)。そのために、開発する教材では、これらの言語活動を前提に、a) 単語レベル、b) 句レベル・節レベル・文レベル、c) 文章・談話レベルのそれぞれの問題演習を段階的に配列し、最終的に大学での実際の授業に近い課題へとつなげていく。文章・談話の理解過程と言語処理の深さを考慮し、単語を中心とする表層的なレベルのみならず、

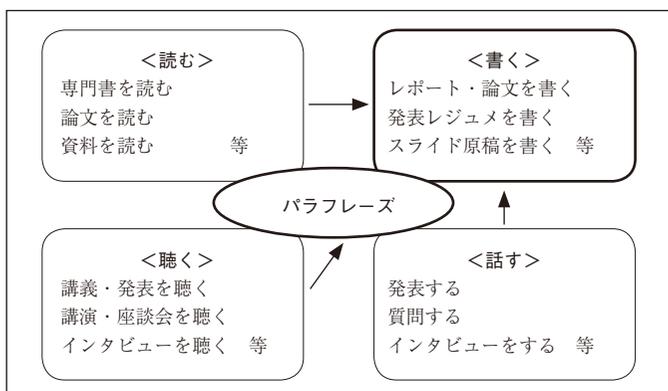


図1 本研究が想定するパラフレーズ場面

表2 本教材が目指す言語活動及び取り上げる表現形式

本教材が目指す言語活動	表現形式
〔読む〕→〔書く〕・関連文献を読んでレポートの一部とまとめる	文章
〔聴く〕→〔書く〕・講義や講演を聴いてレポートにまとめる ・インタビュー調査で得られた発言内容をレポート・論文の一部とまとめる	文章
〔話す〕→〔書く〕・ゼミで発表した内容をレポート・論文にまとめる ・ゼミで発表する内容を発表レジュメ・スライド原稿にまとめる	文章 見出し・箇条書き
〔書く〕→〔書く〕・レポート・論文の内容を発表レジュメ・スライド原稿にまとめる ・論文の要旨を規定の字数でまとめる	見出し・箇条書き 文章

概念レベルでのパラフレーズまでを含めることとする⁸。

第二に、単語レベルのパラフレーズの強化を図る。従来の主要な日本語教科書で取り上げられているパラフレーズは、前章の表1に示した通り、文末表現、接続表現、縮約形、副詞等のように話しことばと書きことばの違いが明確なものに集中している。だが、アカデミック・ライティングに必要となるのは、この種のパラフレーズに限らない。ジャンルに応じたパラフレーズ(例.[エッセイ]面白い→〔論文・レポート〕興味深い)や、日常語彙から専門語彙へのパラフレーズ(例.もうけ→利潤)をはじめ、種々の単語の使い分けに関わる練習も取り入れ、目的や伝達手段等に応じた適切な言語表現への習熟を図る。ある単語から別の単語に言い換える場面であっても、句や節、文、文章・談話といったより広い範囲からパラフレーズを捉えるようにすることを段階的な練習に組み入れる。

次節では、これらの点を反映させて開発した教材の一部を試案として提示する。

4.2 教材の試案

4.2.1 主な対象

大学・大学院で日本語によるレポート、論文、発表レジュメ、スライド原稿を書く必要がある、上級レベルの留学生(日本語能力試験N1程度)が主な対象である。学習者の専攻分野は特に限定せず、一般的に共通して取り組める内容とする。

⁸ van Dijk and Kintsch (1983) を参照。

4.2.2 全体の構成と内容

教材全体の構成を図2に示す。教材は、「基礎編」「発展編」「実践編」から構成される。

「基礎編」では、主として一対一に対応する単語レベルでのパラフレーズに焦点を当てる。具体的には、「話しことばから書きことばへ」「和語と漢語」「名詞化」「ジャンルによる語の使い分け」「日常語彙から専門語彙へ」等を取り上げる。一連の問題では、語の共起にも配慮する⁹。

「発展編」では、パラフレーズの範囲を句、節、文、文章・談話に広げ、それらの意味を読み取って言い換える練習を行う。具体的には、「複数の文や長い文をまとめる」「上位概念」「含意」「事柄・事象の説明を簡潔に言い換える」等を取り上げる。これらは、「複数の文をまとめる」を除き、従来の日本語教材ではほとんど扱われていなかったものであり、この点が本教材の特長となる。「基礎編」及び「発展編」のそれぞれの最後には、学習した内容を総括する総合的な問題演習を設ける。文系、理系、文理共通のそれぞれに対応した話題になるように考慮する。

「実践編」では、総仕上げの課題として、書く目的と読み手を具体的に明示した上で、内容・分量ともに実際に課されるレポート、論文、発表レジュメ、スライド原稿とほぼ同じかそれに近い形式の問題演習を提示する。

本教材の活用にあたっては、レポート・論文作成を主眼に置いた留学生用日本語教科書との併用を想定しているが、解説や解答、単語リストなどを巻末に加え、日本語の授業を受ける機会があまりない留学生でも独学で学べるような構成・内容とする。

⁹ 例えば「N₁を選ぶ」を「N₁のN₂」に言い換える場合には、「職業の選択」「委員の選出」「特別賞の選考」のように、N₁によって対応する名詞が異なる。

基礎編 単語を言い換える（狭い範囲のパラフレーズ）

- 第1課 話しことばから書きことばへ 例. やっぱり → やはり
- 第2課 和語と漢語 例. 分ける → 分類する
- 第3課 名詞化 例. 経済が発展する → 経済の発展
- 第4課 ジャンルによる語の使い分け 例. (エッセイ) 面白い → (レポート・論文) 興味深い
例. (新聞・ウェブサイト等) 消費量のダウン → (レポート・論文) 消費量の低下
- 第5課 日常語彙から専門語彙へ 例. もうけ → 利潤
- 《総合問題1》 文系対象
- 《総合問題2》 理系対象
- 《総合問題3》 文理共通

発展編 意味を読み取って言い換える（広い範囲のパラフレーズ）

- 第1課 複数の文や長い文をまとめる
例. A町では、賛成意見が8割に上った。これに対し、B町では、賛成意見が半数にも満たない。
→ 賛成意見が8割に上る A町に対し、B町では賛成意見が半数に満たない。
- 第2課 上位概念に言い換える
例. 新聞社や放送局、通信社の人件費を調査した。 → 報道機関の人件費を調査した。
- 第3課 含意を取り出す
例. 「掲示物の字が小さくて読めないよね。」 → 読みやすい大きさの字で掲示すべきである。
- 第4課 事柄・事象の説明を簡潔に言い換える
例. 人と人との関係について悩む人が多い。 → 人間関係について悩む人が多い。
- 《総合問題1》 文系対象
- 《総合問題2》 理系対象
- 《総合問題3》 文理共通

実践編 目的に応じた形式で書く（実際場面に近い問題演習）

- 《実践問題1》 関連文献を読んでレポートの一部としてまとめる
- 《実践問題2》 講義や講演を聴いてレポートにまとめる
- 《実践問題3》 インタビュー調査で得られた発言内容をレポート・論文の一部としてまとめる
- 《実践問題4》 ゼミで発表した内容をレポート・論文にまとめる
- 《実践問題5》 ゼミで発表する内容を発表レジュメ・スライド原稿にまとめる
- 《実践問題6》 レポート・論文の内容を発表レジュメ・スライド原稿にまとめる
- 《実践問題7》 論文の要旨を規定の字数でまとめる

図2 教材の構成

4.2.3 問題演習の例

図3-1、図3-2に問題演習の一例を示す。これらは、基礎編「第3課名詞化」の一部である。本課は、他の課と同様に、説明、ステップ1、ステップ2、ステップ3から構成され、名詞化に関する説明の後、適切な語を選択肢から選ぶ問題（ステップ1）、同様に適切な語を括弧に書き入れる問題（ステップ2）を経て、実際の言語使用場面に近い問題（ステップ3）へと進む。

基礎編	第3課 名詞化
<p>発表レジュメやスライド原稿では、箇条書きで書くことが多く、そのときに動詞と同じ意味の名詞に置き換えて表現することがある。</p> <p>動詞を名詞に置き換えるには、次の方法がある。</p> <p>A. 同じ意味の漢語を用いる</p> <p>例. パソコンが壊れる → パソコンの故障 利用状況を調べる → 利用状況の調査</p> <p>B. 動詞の連用形を用いる</p> <p>例. 列車が遅れる → 列車の遅れ ゴミを埋め立てる → ゴミの埋め立て</p> <p>C. 「こと」を用いる</p> <p>例. 意見を述べる → 意見を述べること</p> <p>注意: 箇条書きでは、表す意味によっては「名詞+の+名詞」以外のものもある。</p> <p>例. 利用状況を調べる → 利用状況を調査</p>	
ステップ1 ★	
<p>【問題】例のように、適切な語を選びなさい。</p> <p>例. パソコンが壊れる → パソコンの (㉔ 故障 b. 壊れ c. 破壊) 列車が遅れる → 列車の (a. 遅刻 ㉕ 遅れ c. 遅滞)</p> <p>1. 気温が上がる → 気温の (a. 上がり b. 高騰 c. 上昇)(中略).....</p>	
ステップ2 ★★	
<p>【問題Ⅰ】例のように、適切な語を書きなさい。</p> <p>例. パソコンが壊れる → パソコンの (故障) 列車が遅れる → 列車の (遅れ)</p> <p>1. 講演会を開く → 講演会の ()(中略).....</p> <p>【問題Ⅱ】例のように、文の意味を変えずに書き換えなさい。</p> <p>例. 列車が遅れて、約2万人の通勤客に影響が出た。 → (列車の遅れ) が原因で、約2万人の通勤客に影響が出た。</p> <p>1. 日系企業と外資系企業における給与を比べたものを図1に示す。 → 日系企業と外資系企業における () を図1に示す。(中略).....</p>	

図3-1 教材例（「基礎編 第3課名詞化」の一部）

図 3-2 に示したステップ 3 の問題は、一連の談話内容をパワーポイントのスライド原稿の一部として書く課題である。表現形式の違いに応じたパラフレーズを考えさせる。

ステップ 3
☆☆☆

【問題】 以下は、「日本の『食』とウナギ養殖研究」という発表内容の一部である。この内容について、パワーポイントのスライド原稿の一部として下線部 _____ を書き換えなさい。

ウナギは、和食を代表する食品の一つですが、食卓に並ぶシラスウナギ*は、地球規模で減っており、このままでは絶滅するという説があります。そこで、重要なのがウナギを守るという観点からの調査研究です。そのためには、第一に、ウナギの生態を明らかにすることが不可欠です。第二に、天然資源への影響を慥くし、完全養殖を達成することです。

これまでの研究をふり返ると、ウナギの産卵場調査は 1960 年代に始まりました。産卵をピンポイントで抑えるために、二つの仮説が立てられました。一つ目は、マリアナ沖**で産卵するという仮説で、もう一つは、新月の時期に産卵するという仮説です。(以下、略)

*シラスウナギ (glassweel) : うなぎの一種。

**マリアナ沖 (Mariana Offshore) : 太平洋の北面にあるマリアナ諸島周辺の海



(参考: 「朝日新聞」2010 年 12 月 27 日, 「農学 命を育む」東京大気海洋研究所教授・塚本勝巳氏の基調講演による)



《スライド原稿》

研究の背景 I

- シラスウナギの地球規模での _____ → 絶滅?
- ウナギの _____ に関する研究
 1. 生態の解明
 2. 天然資源への影響を _____ → 完全養殖の達成
- ウナギの産卵場調査 …… 1960 年代に _____
 - 仮説 1 マリアナ沖で産卵する
 - 仮説 2 新月の時期に産卵する

図 3-2 教材例 (「基礎編 第3課 名詞化」の一部)

他の課においても、このような段階的な問題演習を通して、個々のパラフレーズがそれぞれどのような場合に必要になるのかを意識させ、アカデミック・ライティングにふさわしい言語表現が実際に使えるようになることを目指す。

5. まとめと今後の課題

以上、留学生を対象にした日本語アカデミック・ライティング教育の観点から、多様なパラフレーズを段階的に学習できる教材の必要性について述べるとともに、第二言語としての日本語によるパラフレーズの教育方法を教材の面から検討した。

本研究の成果は、大きく次の二点にまとめられる。第一に、「読む」「聴く」「話す」の各技能と「書く」ことを結びつけた教材開発により、パラフレーズの練習を実際の言語運用場面に近づけて行うことが可能になった。「読んだことを書く」「聴いたことを書く」といった一連の言語活動において、パラフレーズは欠かせない。学習者自身がこのことを意識することがまず重要であり、教材開発上、そうした構成と問題の充実を図った。部分的ではあるが、教材を試用した学習者からも概ね肯定的な評価を得ている。

第二に、多様なパラフレーズを段階的に学べる構成により、レポートや論文、発表レジュメ、スライド原稿のそれぞれに必要な種々のパラフレーズをより幅広く取り上げることが可能になった。既存の日本語教科書では、単語と単語との対応でパラフレーズを捉えることが中心だったのに対し、本研究では、従来の教材にはなかった、文章・談話の視点を取り入れることの重要性を強調した。

今後の検討課題は、次のとおりである。現在は、第一段階として紙媒体による教材化を進めているが、複数の言語技能の横断にあわせて CD や Web での提示を視野に入れる必要がある。それに伴い、聴解による理解過程との相違に基づく検証が今後の課題となる。また、素材となる問題文の作成にあたって、文章・談話研究における一貫性及び結束性に関する研究から得られる示唆は大きい。諸研究の成果を教育に反映させる上で、関連する基礎研究の一層の充実が望まれる。加えて、問題文に取り上げる語彙の選定には、学術共通語彙の検討が不可欠である。本研究における問題文の作成では、松下（2011）による学術共通語彙を参照しているが、学術的な場面に関係するコーパスと連携した展開をさらに進めていくことが重要である。

以上をふまえ、今後は、市販教材としての出版に向け、学習者及び教師による試用と学習効果の検証を重ね、教材の有用性を一層高めていくとともに、学術的な場面での話すためのパラフレーズ教材についても発展的に考えていきたい。

付記

本研究は、科学研究費補助金基盤研究（C）「日本語学習者のライティング能力向上を目指したパラフレーズ教育方法に関する研究」（課題番号 22520518 研究代表者：鎌田美千子）の一部である。また、本稿は、日本語教育学会 2010 年度第 7 回研究集会での研究発表「日本語アカデミック・ライティング教育におけるパラフレーズ教材の必要性和開発の試み」の内容に更なる考察と教材の具体的な提示を加え、まとめたものである。なお、本稿で提示した教材開発の事例は、研究協力者である山形大学大学院理工学研究科准教授 仁科浩美氏との共同研究によるものである。

参考文献

- 鎌田美千子（2010）「文体の違いへの対応に見られるパラフレーズの分析—留学生の要約文における語の使用に着目して—」『外国文学』59号, 宇都宮大学外国文学研究会, pp.9-25
- 鎌田美千子（2011）「具体例からの抽象化に伴うパラフレーズの分析—文体の違いを文章・談話レベルから考える—」『外国文学』60号, 宇都宮大学外国文学研究会, pp.55-66
- 鎌田美千子（印刷中）「第二言語としての日本語によるパラフレーズの問題とその教育方法—アカデミック・ライティング教育の観点から—」仁科喜久子監修, 鎌田美千子・曹紅荃・歌代崇史・村岡貴子編『日本語学習支援の構築—言語教育・コーパス・システム開発—』, 凡人社
- 鎌田美千子・仁科喜久子（2009）「文章の難易度とパラフレーズとの関係—中国人・韓国人日本語学習者と日本語母語話者の比較—」『日本語教育論集』25号, 独立行政法人国立国語研究所, pp.19-33
- 川原裕美（1989）「要約文のパラフレーズの諸相」佐久間まゆみ編『文章構造と要約文の諸相』, くろしお出版, pp.141-167

- 仁科喜久子 (1993) 「音声対話ディスコースにおけるパラフレーズとコヒージョンの分析とその形式化の研究」『文部省科学研究費補助金重点領域研究「音声・言語・概念の統合的処理による対話の理解と生成に関する研究」平成5年度研究成果報告書』, 京都大学, pp.59-62
- 畠弘巳 (1987) 「話しことばの特徴—冗長性をめぐって—」『国文学 解釈と鑑賞』52 卷7号, 至文堂, pp.22-34
- 藤村知子 (1998) 「要約文作成における中級日本語学習者のパラフレーズの問題」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』24号, 東京外国語大学留学生日本語教育センター, pp. 1-21
- 松下達彦 (2011) 「日本語の学術共通語彙 (アカデミック・ワード) の抽出と妥当性の検証」『2011 年度日本語教育学会春季大会予稿集』, 日本語教育学会, pp. 244-249
- van Dijk, T. A. and Kintsch, W.(1983). *Strategies of Discourse Comprehension*. New York: Academic Press.